

ひととひと ふれあい、つながる

# いっぶく

2018 号外  
JA京都市事業だより

事業だよりも  
250号を  
迎えました!



▲「みのり」をテーマとしたサンドアートパフォーマンスが披露された



式典では構想から1年以上かけて作成した70周年テーマ映像を上映しました。この映像は、JA京都市ホームページで後日閲覧できる予定です。「松尾祭」と「ずいき祭」を通じ、農と地域の密接な関わりを伝えています。そして農業の夢、組合の夢を語っています。多くの皆様にご覧いただき、私たちの姿勢が伝わりましたら幸いです。

11月10日、リーガロイヤルホテル京都で、組合設立70周年記念式典を執り行いました。

## おかげさまで70周年

平成最後の年に迎えた設立70周年を記念して、いっぶく初となる「号外」を発行しました。限られた紙面ですが、JA京都市がこれまで歩んできた70年を当時の貴重な写真とともに振り返ります。

JA京都市は1948年（昭和23年）8月6日に設立し、今年70周年を迎えることができました。このことは、私たち役員一同にとってこの上ない喜びです。めまぐるしく変化する社会情勢のもと、時代の波に流されず独立独歩を貫き、記念すべき年を迎えられたのも、組合員皆様の永きにわたるご理解とご協力の賜物と改めて感謝申し上げます。

# ここから新たな歴史が始まる・・・

## （J A 京都市 70 年を振り返る）



### 草創期

（昭和 23 年～46 年）

戦後の混乱から日本が復興を進めていった昭和 23 年、当 J A は京都駅に程近い下京区役所内に本店を構え事業を開始しました。

J A の前身である農業会が集結し、事業活動を開始しました。その後、昭和 24 年に山科北部支所の開設、上鳥羽信用組合の吸収合併などが行われました。そして、昭和 34 年からは共済事業が始まり、組合の事業基盤が固められました。

その一方で、京都市は伝統的に、農家自らが農産物を運搬しながら販売して回る「振り売り」が、主な流通形態として伝統的に受け継がれていたため、J A が設立しても、販売事業に関われないもどかしい経験を味わいました。

しかし、生産者と消費者の顔

の見える取り引きによって築かれた信頼関係は、70 年続く「J A 京都市」を支える礎となり、今日推進されている地産地消の原形を作り出したものと言えます。



▲設立時、下京区役所内に本所を置いていました（現在の中央郵便局辺り）



▲姉さん被りで振り売りする姿はまるで京香さんのようです



▼昭和 30 年頃から機械化が進みました



### 発展期

（昭和 47 年～平成 3 年）

高度経済成長期からオイルショック、そしてバブル経済という激動の時代背景の中、当 J A は事業の多様化・拡大化を果たして発展を遂げました。

沖縄が本土復帰した昭和 47 年には信用事業の貯金量が 100 億円を突破。昭和 49 年 7 月に現在の右京区西院に本店を構えることとなりました。新紙幣発行の昭和 59 年には、為替業務を開始しました。

京都市内では洛西ニュータウン（西京区）など、大規模な宅地化が進んだこともあり、農地は減少しましたが、農家組合員は郊外に農地を確保するなど農業を継続しました。土地活用を行う農家組合員も増え、それに伴って共済事業も大きく伸長した時代でもありました。



▲桂周辺の稲架け 京都のあちらこちらで見られました

### 進化期

（平成 4 年～25 年）

平成に入ると、J A を取り巻く環境は大きく変化しました。平成 4 年には一般市民に農協のイメージをより浸透させるために全国の農協が一斉に「J A」の愛称を名乗るようになりました。

その一方で、全国的に J A の広域合併が急速に進展し、京都府内においても昭和から平成に移る時代には 70 余りあった J A が、平成 17 年には 5 J A となりました。

当 J A においても、合併か否かの選択を迫られました。強固な財務体質を背景に、府下で唯一独立独歩を貫きました。それまで府内最大規模を誇っていた当 J A は、組合員数や職員数で一番小さな J A となりました。が、財務体質は今なおトップレベルの数値を保っています。

合併しないという決断は、時代の波に流されないという当 J A の理念がより強固になった出来事でもありました。これを契機に当 J A の結末は一段と強ま

り、JAの存在意義をより明確にすべく自己変革の歩みを進めました。



▲JA共済農林水産大臣表彰を受ける(平成7年)



▲夏季農産物品評会

## 展 望 期

(平成26年～現在)

農業者の高齢化で正組合員が減少し、准組合員が増加する新たな局面を迎え、農業を取り巻く環境が大きく変化する中、農家組合員に寄り添い「夏の大感謝祭」の開催や出向く営農体制の充実など、都市農業と当JAへの理解を醸成してきました。

そして今年、新たなJA京都市を目指し、マスコット・キャクター「京香<sup>きょうか</sup>さん」を誕生させ、京都府内のJAでは初となる金融移動店舗「はんなり号」を導入しました。越畑・水尾地域への金融サービスの提供のほ

か、大規模災害時の被災地支援の役割を担っています。さらに京都学園大学との連携、JA京都市版GAP導入など「安全・安心な農産物の提供」「京野菜ブランドの価値向上」の取り組みを実践し「農家組合員の所得増大や地域とのさらなる関係強化」につながる諸策を展開しています。

これらの取り組みは農業者と地域社会が一体となり、地元に着目したJAを目指す第一歩であり、密着したJAを目指す第一歩です。これからは、農業者や地域住民からの理解が不可欠です。これからの時代への適応力を失うことなく、農業者や地域の皆様から必要とされるJAを目指し、歴史都市京都の農業振興と地域振興に努めて参ります。



▲毎年恒例となった夏の大感謝祭(上)  
▲ベジベジキッズ(下)

## 農業の夢、 組合の夢

京都市は1200年以上の歴史をもつ都市です。近郊では、都市に暮らす人々の食生活を支える農業が盛んに営まれてきました。京野菜はその長い歴史と伝統の中で結実し、現在に継承されてきたものです。これからの歴史ある京都市の農業が発展し、京野菜が今まで以上に浸透していくには、生産者と消費者の関係強化が欠かせません。

これから農業やJAを取り巻く環境は一段と厳しくなるものと予想されます。だからこそ次世代が希望を持てる農業の新たな形を私たちが築いていくという気概を持ち、その実践に邁進して参ります。



▲JA京都市版GAP現地調査の様子



▲婦人部料理コンクール



▲青壮年部ソフトボール大会

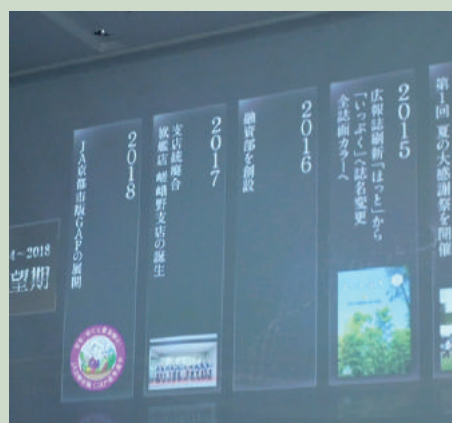


▲松尾に京都市農協購買店舗がありました



昔はこんな事もありましたなあ

## 組合設立70周年記念式典の様子



祈りを込めて、土を耕し、種をまく。  
 苗を育み、恵みを授かり、感謝を捧げる。  
 いにしえよりくりかえされてきた人々の暮らしが続く限り、  
 私たちは農業を支え、農業を守り続けます。

### 参考資料

- 『京都写真館 なつかしの昭和20～40年代』（淡交社）
  - 『写真集 京都府民の暮らし百年』（京都府）
  - 『下京区百十周年記念誌 躍動下京』（下京区百十周年記念委員会）
- その他、関連団体の記念誌や組合員の方々より写真を提供していただきました。ご協力ありがとうございました。

